

# 都立専門高校の生徒の 大学進学希望とその規定要因

岡部 悟志 (Benesse 教育研究開発センター研究員)

## ◆要約

- ◎本稿の目的は、都立専門高校から大学進学を志す生徒の特徴を把握することである。
- ◎普通科進路多様校との対比から、両者に共通する特徴として、現在の校内成績が良好な生徒ほど、高学歴の親を持つ生徒ほど、大学進学を希望することが確認された。
- ◎ところが、専門高校の生徒に限って、大学進学実績がよいことを理由に現在の高校に入学した生徒ほど、その後も大学進学を強く希望する傾向があり、かつ、その背景には、親学歴の影響があることがわかった。
- ◎都立専門高校からの大学進学の背景には、高校選択時より進行する親子間の学歴下降回避行動 (吉川 2006, 2009) が存在する可能性がある。

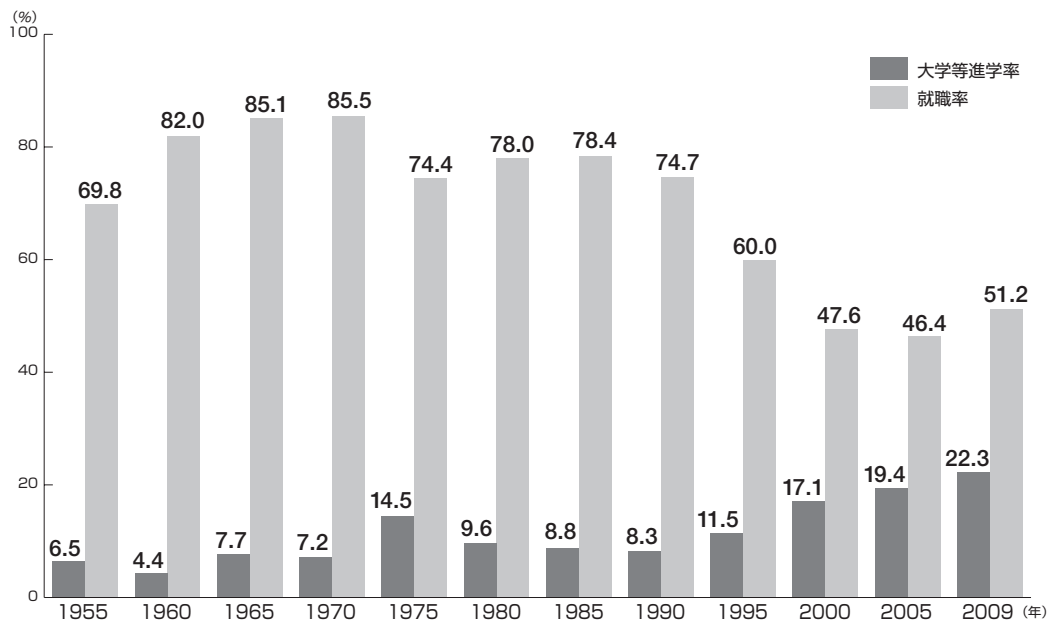
## 1 問題関心

トラッキング理論に従えば、専門高校の本来的な機能は、入学時の学力が決して高いとはいえない生徒を、卒業後に就職という進路へ水路づけることにある。実際、1990年頃までは、全国の専門高校の卒業生の7～8割が就職を選択していた。ところが近年、その専門高校からの大学進学者が増加している。2000年以降、卒業後に就職する専門高校の生徒は5割前後に落ち込み、その一方で、これまではあまり想定されていなかった大学への進学者が徐々に増加傾向にある(図1)。東京都教育委員会の『公立学校統計調査報告書「進路状況調査編」』を参照すれば、都立専門高校においても、全国と同様に大学進学者が増加傾向にあり、現在では、およそ2割の生徒が卒業後に大学へ進学している実態がわかる。

専門高校からの大学進学者が増加した背景

には、いくつかの要因が考えられる。中村(2006)は、この現象を説明する外的な環境要因として、①入学枠の拡大と少子化の影響で大学に入りやすくなっていること、②不況の影響のため高校卒業後の就職が困難であることを挙げている。さらに、進路多様校の生徒を対象とした調査データの分析から、近年の推薦入学の普及が専門高校の生徒を大学進学へ向かわせている可能性を提示している。ここから中村は、「職業教育中心の専門高校と一般の大学とを推薦入学が平易に繋いでしまったことは、高大接続の観点から再度検討すべき課題なのかもしれない」(中村 2006: 141)としているが、その一方で、これまで卒業後は就職という進路にほぼ限定されていた専門高校の生徒に対して、新たに大学進学という「セカンド・チャンス」(シム 2004)を与え、さらなる教育アスピレーションを醸成しているとすれば、そのことじたい望まし

図1 専門高校の生徒の大学等進学率と就職率の推移（1955～2009年度、全国）



注) 文部科学省「学校基本調査」、2009年のデータは「速報値」。

いことなのかもしれない。ただし、そのようなセカンド・チャンスが専門高校の生徒にとって開かれたものなのかどうかは、必ずしも判然とはしていない。このような問題関心から、本稿では、都立専門高校の生徒の大学進学希望の規定要因を明らかにすることを目的とし、分析を進めていく<sup>1</sup>。

## 2 先行研究のレビュー

専門高校、あるいはより広義に、普通科進路多様校の生徒も含めた層に着目し、彼／彼女らの大学進学を含めた進路形成の解明を目的とした調査研究は、近年、徐々に蓄積され始めている。質問紙調査による量的データを用いた研究として、藤原・中村・岩田(2008)がある。そこでは、近畿圏にある5つの進路多様校(普通科2校、工業科2校、商業科1校)の生徒を対象とした高校3年間の縦断的調査のデータを用いて、入学時に就職希望だった生徒がその後、大学(四年制)進学にシフトする背景要因を探っている。分析の結果、

生徒の出身階層の影響は確認されなかった一方で、普通科の生徒ほど、校内成績が良好な生徒ほど、就職から大学進学へシフトする傾向があるとしている。

一方、ケーススタディーに基づく質的データを用いた研究としては、千葉・大多和(2007)がある。首都圏に立地するA商業高校の生徒の「進路カルテ」(進路指導部が生徒一人一人の進路希望や進路指導の経過を逐一記載し、指導の状況を管理するためのカード)を用いた分析を行い、学校が提供するいくつかの進路形成チャンネルを通して、生徒が最終的な進路を形成する過程を描き出している。それによれば、「コーチング」(教師によるボランティアなプログラムを通じた生徒の進路支援活動)と呼ばれる進路形成チャンネルを通して、大学進学を目指すケースが見られるとしている。進路を基軸とした動機づけが困難な進路多様校においては、全体的に、生徒が学校・教師側のどんな指導/支援のチャンネルに属することができるかが重要な要因となることが述べられている。また、西

村（2006）は首都圏の普通科進路多様校から大学進学を目指す3名の生徒の進路選択過程を丁寧に描き出している。そこでは、成績良好だが、大学進学経験のない非大卒の親のもとで育った生徒にとって、大学進学という進路希望がそもそも形成されにくいこと、それゆえに、先生からの働きかけがその後の進路形成に大きな影響を与えていることなどが述べられている。また、同研究プロジェクトの総括のなかで、乾（2006）は、保護者面談で親の意向を十分にくんだうえで、先生が生徒に働きかけている実態もうかがわれたとしている。

以上のような先行研究をまとめれば、高校生の大学進学希望を規定する要因は、大きく4つに分類することができる。

- ①**高校間のトラックの影響**：高校間の構造的なランクが、生徒の大学進学希望に影響を与える。つまり、相対的に非進学校に位置づけられる専門高校の生徒ほど、大学進学を希望しない。
- ②**高校内における個人の学業成績の影響**：生徒本人の学業成績が、大学進学希望に影響を与える。つまり、校内の成績が良好な生徒ほど、大学進学を希望する。
- ③**出身階層の影響**：生まれの家庭環境条件が、子どもの大学進学希望に影響する。つまり、出身階層が高い生徒ほど、大学進学を希望する。
- ④**先生や親（＝重要な他者：Significant Others）の働きかけの影響**：先生や親の働きかけが、生徒（子ども）の大学進学希望に影響する。つまり、先生や親の関与が強いほど、その生徒（子ども）は大学進学を希望する。

さらに、先行研究に共通する課題をあげるとすれば、以下の2点と考えられる。第1の課題点は、既存の研究の多くが専門高校と普通科進路多様校の生徒を混同して分析しているか、そうでない場合はどちらか一方の限られたサンプルを対象としている点である。専

門高校と普通科進路多様校は、本来の理念からしても実態からしても、大きく異なっている。であるならば、専門高校と普通科進路多様校とで、生徒の大学進学希望の形成要因が異なっている可能性は十分に考えられる。また第2の課題点としては、①～④に示した大学進学希望の主な規定要因は、生徒の属性の1つとして位置づけられる③出身階層の影響を除けば、いずれも高校入学後の範囲内にとどまっている。高校入学以前の生徒の状況が、何らかの形でその後の大学進学希望に影響する可能性も考えられる。このような観点からも、次節で説明するような新たな仮説の構築と調査データによる検証が求められる。

### 3 仮説の設定

以上の議論を踏まえ、本研究では以下のような4つの仮説を設定した。仮説1～3は、2節でまとめた生徒の大学進学希望を形成する背景要因の①～③に対応している。なお、④先生や親の働きかけの影響については、ここに仮説として含めていない。先生や親の働きかけが生徒の進路選択に小さくない影響を与えることは確からしいものの、その因果関係は、必ずしも一意に定まるものではないし、乾（2006）が指摘するように、親の意向を十分にくんだうえで生徒へのアプローチが行われている可能性もある。そのため、ここでは、その他の説明変数が大学進学希望に与える効果をより正確に抽出するための統制変数として導入することにする。なお、仮説2～4については、2節で述べた先行研究の第1の課題点を受け、専門高校と普通科進路多様校では生徒の大学進学希望の規定要因が異なるのではないかという想定のもと、専門高校と普通科進路多様校に調査データを分割したうえで分析を行う。また、仮説4は、先行研究の第2の課題点を受け、高校入学以前の要因が生徒の大学進学希望に影響するのではないか、という推測から設定されたものである。

- 理論仮説1：低位トラックの高校の生徒ほど、大学進学を希望しない。
- 作業仮説1：「専門高校」の生徒は、「普通科進路多様校」の生徒よりも大学進学を希望しない。
- 理論仮説2：校内における学業成績が良好な生徒ほど、大学進学を希望する。
- 作業仮説2：学科によらず、「現在の校内成績」がよい生徒ほど大学進学を希望する。
- 理論仮説3：出身階層が高い生徒ほど、大学進学を希望する。
- 作業仮説3：学科によらず、「親大卒」の生徒ほど大学進学を希望する。
- 理論仮説4：高校の大学進学の実績のよさを理由に現在の高校に入学した生徒ほど、現在（調査を行った高校2年生時）も大学進学を希望する。
- 作業仮説4：学科によらず、「大学進学の実績がよいから」現在の高校に入学した生徒ほど、現在（調査を行った高校2年生時）も大学進学を希望する。

## 4 分析に用いる変数の設定

分析に用いる変数は、表1の通りである。説明変数のうち、「親大卒」について補足が必要と思われる。「親大卒」は、生徒の父親と母親が最後に卒業した学校段階をたずねた質問を用い、少なくともどちらか一方が「四年制大学」または「大学院」を卒業した場合を1、それ以外を0としたダミー変数である。ところが、この質問にたいに無回答が多く（回答者への配慮のため、質問の前に「さしつかえがなければお答えください」と表記していることが影響しているかもしれない）、非該当も多かった（学校単位での回答拒否などがあったためと思われる）ため、分析に使用できるサンプル数は、有効サンプル数よりもかなり少ない。そのため、「親大卒」という変数を分析に導入することは、分析から「親大卒」の欠損サンプルを除外してしまうことになり、必ずしもサンプル全体の傾向を反映しなくなる可能性がある。しかし、本稿の分析のポイントである生徒の出身階層を一定の精度をもって判別できる質問としては親学歴が適切であると考え、分析サンプル数が

表1 分析に用いる変数

種類	変数名	質問番号	内容
目的変数	大学進学希望ダミー	Q46	「卒業後進路」で「四年制大学に進学する」または「短大に進学する」= 1、それ以外= 0としたダミー変数。
説明変数	学科ダミー	Q1B	「専門高校」= 1、「普通科進路多様校」= 0としたダミー変数。
	現在の校内成績	Q11B	「校内成績」で「下のほう」= 1点～「上のほう」= 5点として得点化。
	親大卒ダミー	Q57A・B	「父親学歴」「母親学歴」で父親・母親のうち少なくとも一方が「四年制大学」または「大学院」= 1、その他= 0としたダミー変数。
	高校入学理由 「大学進学の実績がよいから」	Q16D	「入学理由——大学進学実績」で「まったくあてはまらない」= 1点～「とてもあてはまる」= 4点として得点化。
統制のための変数	男子ダミー	Q2A	「性別」で「男子」= 1、「女子」= 0としたダミー変数。
	中2時成績	Q24	「(中2生のときの) 校内成績」で「下のほう」= 1点～「上のほう」= 5点として得点化。
	保護者との進路相談	Q55C	「進路や将来の仕事を保護者と話す」で「ほとんど話さない」= 1点～「ひんぱんに話す」= 4点として得点化。
	先生との進路相談	Q48B	「先生に進路相談」で「まったく積極的でない」= 1点～「とても積極的」= 4点として得点化。
	専門高校内学科ダミー	Q1B	「商業科」を基準としたときの「工業科」「農業科」をあらわすダミー変数。専門高校の分析に限って利用。

少なくなることは認識しつつも、あえて「親大卒」を使用することにした<sup>2</sup>。なお、「中2時成績」は「現在の校内成績」が大学進学希望に与える純粋な効果を抽出するための統制変数として導入を試みた。なお、分析にあたっては、ウェイト1の重みづけを用いる。

## 5 調査データによる仮説の検証

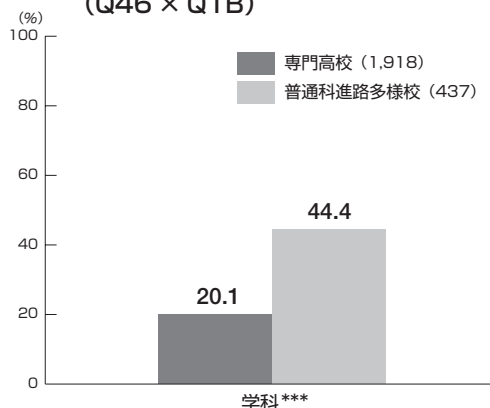
### 5.1 クロス集計

以上の検討を踏まえ、以下では目的変数である「大学進学希望」と、説明変数として設定した「学科」「現在の校内成績」「親大卒」「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」のクロス集計を行った。

まず、仮説1で想定された「学科」が生徒の大学進学希望に与える影響を確認する。図2より、普通科進路多様校では4割強の生徒が大学進学を希望しているのに対し、専門高校ではその半分以下の2割にとどまる。1節では、近年、専門高校からの大学進学者が徐々に増加傾向にあることを確認したが、それは専門高校だけを取り出して見た場合の傾向であり、普通科進路多様校との比較として見れば、専門高校の生徒と普通科進路多様校の生徒のあいだには、依然として大学進学希望に関する大きな差が存在している。以上より、仮説1は支持されたといえる。

次に、仮説2～4に該当する3つの説明変数（「現在の校内成績」「親大卒」「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」）について、「学科」の分析の場合と同様に、それぞれ「大学進学希望」とのクロス集計を行った（図3、図4、図5）。まず、「現在の校内成績」については、専門高校でも普通科進路多様校でも、現在の校内成績が良好な生徒ほど大学進学を希望する傾向がある（図3）。「親大卒」<sup>3</sup>の影響についても、同様に親の学歴が高いほど（親が大卒であるほど）その子どもは大学進学を希望する。ただし、普通科進路多様校の有意性は10%水準にとどまる（図4）。最後に、「高校入学理由『大学進学の実績が

図2 「大学進学希望」×「学科」  
(Q46×Q1B)



注1) +:  $p < 0.10$ , \*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$ ,  
\*\*\*:  $p < 0.001$ 。

注2) ( ) 内はサンプル数。

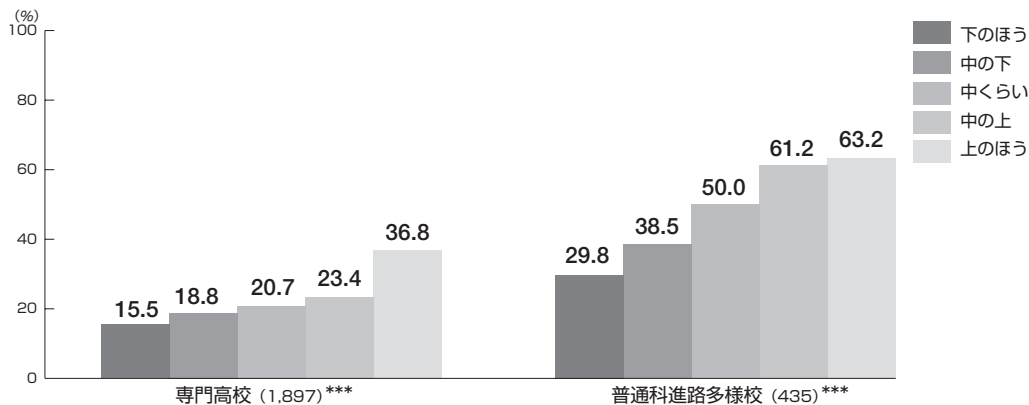
よいから』」に関しては、専門高校については正の有意な関連が確認されたが、普通科進路多様校ではグラフの形状から同様の傾向はうかがえるものの、有意な関係があるとはいえないものであった（図5）。以上の分析からは、仮説2～4のうち、前二者が支持され、最後の仮説4が支持されなかったということになる。しかしながら、クロス集計のレベルでは、各説明変数が目的変数に与える純粋な効果が識別できていないという限界がある。この点を解消するためには、次項に示すように、手法を変えて、さらなる分析が必要と思われる。

### 5.2 ロジスティック回帰分析

以上の議論を踏まえ、ここでは生徒を取り巻く様々な背景要因をコントロールしたうえで、「現在の校内成績」「親大卒」「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」が生徒の大学進学希望に与える影響について検証する。すでに述べたように、専門高校と普通科進路多様校では、大学進学希望の規定要因が異なるのではないかという想定のもと、専門高校と普通科進路多様校とに調査データを分割したうえで分析を行うことにする。

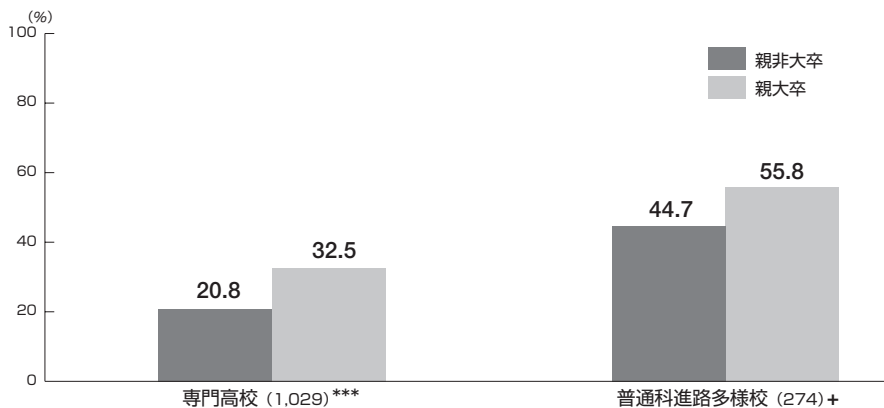
まず、専門高校について。大学進学希望を目的変数としたロジスティック回帰分析（表

図3 「大学進学希望」×「現在の校内成績」(Q46×Q11B)



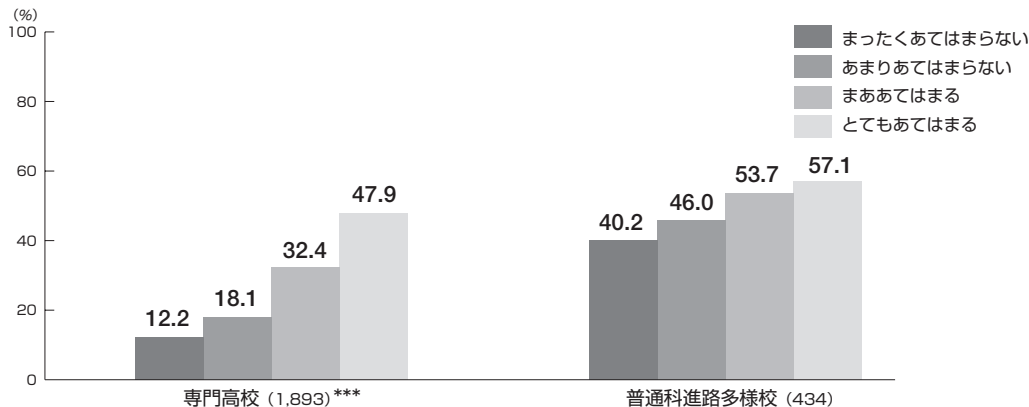
注1) + : p<0.10, \* : p<0.05, \*\* : p<0.01, \*\*\* : p<0.001。  
 注2) ( )内はサンプル数。

図4 「大学進学希望」×「親大卒」(Q46×Q57A・B)



注1) + : p<0.10, \* : p<0.05, \*\* : p<0.01, \*\*\* : p<0.001。  
 注2) ( )内はサンプル数。

図5 「大学進学希望」×「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」(Q46×Q16D)



注1) + : p<0.10, \* : p<0.05, \*\* : p<0.01, \*\*\* : p<0.001。  
 注2) ( )内はサンプル数。

表2 「大学進学希望」の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数		専門高校		普通科進路多様校	
		偏回帰係数	オッズ比	偏回帰係数	オッズ比
性別(基準：女子)	男子ダミー	-0.277	0.758	1.171	3.225***
出身階層(基準：親非大卒)	親大卒ダミー	0.418	1.518*	0.546	1.726+
中学成績	中2時成績	0.014	1.014	0.147	1.159
高校入学理由	大学進学の実績がよいから	0.501	1.650***	0.216	1.241
高校成績	現在の校内成績	0.139	1.149+	0.394	1.483**
重要な他者との進路相談	保護者との進路相談	0.134	1.144	0.165	1.179
	先生との進路相談	0.172	1.188+	0.585	1.796**
学科(基準：商業科)	工業科ダミー	-0.225	0.798		
	農業科ダミー	-0.730	0.482*		
	定数	-3.130	0.044***	-4.148	0.016***
	Nagelkerke 決定係数		0.129		0.220
	モデル適合度		p=0.000		p=0.000
	N		1,007		252

注) +: p<0.10, \*: p<0.05, \*\*: p<0.01, \*\*\*: p<0.001。

2の専門高校の分析結果を参照)の結果、「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」が0.1%水準で強い正の効果をもっていることがわかる。その他、「親大卒ダミー」は5%水準、「現在の校内成績」は10%水準で正の有意な効果をもつ。一方の普通科の場合はどうだろうか。検証の結果(表2の普通科進路多様校の分析結果を参照)によれば、想定された説明変数のうち、生徒の大学進学希望に強く関与しているのは、「現在の校内成績」であった。「出身階層」の影響も確認されたが、その有意性は10%水準にとどまる。そして、専門高校ではもっとも影響力のあった「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」は、普通科進路多様校では何ら影響を与えていなかった。以上の分析から、仮説2、3は支持されたといえるが、仮説4は支持されなかったといえる。つまり、専門高校でも普通科進路多様校でも、生徒の大学進学希望に対して「現在の校内成績」「親大卒」はポジティブな関与をもたらしているが、「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」は専門高校でのみ、生徒の大学進学希望に強い正の効果をもつことが確認された。

以上の分析結果を踏まえ、高校選択時に大学進学の実績がよいから現在の高校に入学したのはどんな生徒なのかを把握するため、さらなる分析を試みた。分析の方法は、「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」を2値の目的変数(「とてもあてはまる」または「まああてはまる」を1、「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」を0としたダミー変数)とし、表2のモデルに投入した変数から高校入学後に決定する3つの変数「現在の校内成績」「保護者との進路相談」「先生との進路相談」を除いたものを説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。検証の結果(表3の専門高校の分析結果<sup>4</sup>を参照)、専門高校の生徒については、「親大卒ダミー」が5%水準で正の有意な効果をもつことが確認された。他方、普通科進路多様校については、定数以外に有意な変数がなく、モデルじたいが成り立たないという結果となった(表3の普通科進路多様校の分析結果を参照)。これより、大学進学の実績がよいという理由で入学するのは、専門高校の生徒に限って、親が大卒であるほどそのような傾向があるといえる。

表3 「高校入学理由『大学進学の実績がよいから』」の規定要因（ロジスティック回帰分析）

独立変数		専門高校		普通科進路多様校	
		偏回帰係数	オッズ比	偏回帰係数	オッズ比
性別(基準：女子)	男子ダミー	0.125	1.133	0.253	1.288
出身階層(基準：親非大卒)	親大卒ダミー	0.400	1.493*	-0.155	0.857
中学成績	中2時成績	0.080	1.083	-0.013	0.988
学科(基準：商業科)	工業科ダミー	-1.785	0.168***		
	農業科ダミー	-1.656	0.191***		
	定数	-0.277	0.758	-2.027	0.132***
	Nagelkerke 決定係数		0.188		0.004
	モデル適合度		p=0.000		p=0.893
	N		1,068		261

注) +: p<0.10, \*: p<0.05, \*\*: p<0.01, \*\*\*: p<0.001。

## 6 結論と考察

本稿では、都立専門高校から大学進学を志す生徒の特徴を、普通科進路多様校の生徒と対比させながら探ってきた。マクロな統計的推移を見てみると、専門高校からの大学進学者が徐々に増加していることがうかがえるが、専門高校の生徒は普通科進路多様校の生徒よりも、大学進学を希望する比率が有意に低い。つまり、専門高校からの大学進学者が漸増している今でもなお、高校間のトラックの影響が生徒の大学進学希望を強く規定している。

そのような構造的な背景などを前提とするならば、専門高校と普通科進路多様校の生徒とでは、大学進学希望の形成メカニズムが異なることが推察される。本稿では、「進路多様校」とひとくくりにして分析されることの多かった専門高校と普通科進路多様校の進路形成の過程を、調査データを分割して分析することにより、規定要因の比較検討を行った。その結果、専門高校の生徒の大学進学希望の規定構造は、普通科進路多様校の生徒のそれとかなり異なっていることが判明した。すなわち、普通科進路多様校の生徒の場合は、総じて「現在の校内成績」が良好なほど大学進学を希望する傾向があるが、専門高校の場合は、高校選択時に「大学進学の実績がよいか

ら」現在の高校に入学した生徒ほど、その後も大学進学を希望する傾向がある。出身階層をあらわす「親大卒」は、専門高校と普通科進路多様校に共通する生徒の大学進学希望を向上させる要因だが、相対的に専門高校において、その影響が強くあらわれていた。

さらに、専門高校の生徒の大学進学希望を強く規定する高校入学理由「大学進学の実績がよいから」に着目し、その規定要因を探ったところ、その背景には、大卒親の影響がうかがわれた。他方、普通科進路多様校では、親学歴の影響は何ら確認されなかった。奇妙なことに、実際の大学進学率は、専門高校のほうが普通科進路多様校よりも低いにもかかわらず、「大学進学の実績がよいから」現在の高校に入学した比率（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％）は、専門高校の生徒で21.4％（「その他の専門学科」を除く）であったのに対して、普通科進路多様校では10.3％にとどまっている。つまり、大学進学を「ねらって」専門高校に入学してくる層が一定数おり、そのような生徒が入学後も大学進学希望をもち続けると推察されるのである。

以上の分析結果を総合すると、普通科進路多様校の生徒は、どちらかといえば出身階層や入学時の状況に左右されることなく、入学後の校内成績が良好であるほど大学進学を希望する。それに対して、専門高校の生徒は、

入学後の校内成績よりも、むしろ、高校選択時に「大学進学の実績がよいから」入学したかどうかはその後の大学進学希望を左右している。そして、そのような入学動機は、親が大卒である生徒ほどもちやすい。

専門高校の生徒が大学進学を希望する背景には、親学歴の影響がある。普通科進路多様校の場合でも若干親学歴の影響は見られるが、その効果は相対的に弱い。このことは、親子間の学歴下降回避行動説（吉川 2006, 2009）から説明できる可能性がある。大卒親は、子どもの学力と、子どもが入学する高校の大学進学の実績を考慮しながら、高校選択時より子どもの進路形成に関与しはじめているのかもしれない。また、子どものほうも、親のそのような期待を内面化して、自分の希望進路

を構築しているのかもしれない。

本稿の冒頭で確認したように、昨今の専門高校の生徒は、就職に加えて新たに大学進学というセカンド・チャンスを与えられているかのように見える。しかしながら、本稿の分析結果によれば、そのような大学進学の手がかりが、必ずしも専門高校の生徒に対して公平に与えられているのではなく、大卒学歴の親をもつ層に対して有利に開かれている可能性がある。そのような傾向がどのくらい独占的なものかについては、さらなる検証の余地が残されているが、少なくとも、昨今の専門高校からの大学進学者の増加は、手放しに望ましいことであるとは言い切れなように思われる<sup>5</sup>。

#### <注>

- 1 分析にあたって、専門高校に含まれる4つの学科（「工業科」「商業科」「農業科」「その他の専門学科」）のうち、「その他の専門学科」に属するサンプルを除いている。「その他の専門学科」の生徒の大学進学希望率が、その他の3学科と比較してかなり高かったためである。これは、「その他の専門学科」の専門高校には、比較的新しい進学型の学校が含まれるためと思われる。
- 2 親学歴回答者は、非回答者と比較して大学進学を希望する比率が高かった。非回答者の親学歴の分布がわからないため推測の域を出ないが、つづく5節で行う分析結果から推察すれば、非回答者に非大卒の親が多く出現すると考えられる。したがって、仮にそれらを含めたサンプルで再分析をしたとすると、親学歴が大学進学希望に与える影響力はさらに大きくなると推察される。
- 3 大卒の親を持つ生徒の比率は、専門高校では30.5%であったのに対して、普通科進路多様校では40.6%であった。
- 4 専門高校の分析結果によれば、工業科ダミーと農業科ダミーが、基準グループである商業科ダミーに比して目的変数に対し強い負の効果をもつ。これはおそらく、今回調査対象とした商業科の専門高校の中には、進学に力を入れている高校が複数含まれているためと考えられる。
- 5 分析で用いたデータは、東京都内の専門高校および普通科進路多様校に限定されたものである。高学歴の親が相対的に多く、かつ大学進学機会に恵まれていることなどが、分析結果に影響している可能性がある。そのため、本稿の知見を全国の傾向として一般化することには限界がある。

#### <引用文献>

- 千葉勝吾・大和多直樹、2007、「選択支援機関としての進路多様校における配分メカニズム——首都圏大都市A商業高校の進路カルテ分析」『教育社会学研究』81: 67-87。
- 藤原翔・中村高康・岩田考、2008、「進路希望の構造と変容——進路多様校を対象とした学校パネル調査データの分析」『桃山学院大学社会学論集』41(2): 213-63。
- 乾彰夫、2006、「『高卒一年目』の若者たちが直面していること——まとめにかえて」乾彰夫編『18歳の今を生きぬく——高卒1年目の選択』青木書店、255-73。
- 吉川徹、2006、『学歴と格差・不平等——成熟する日本型学歴社会』東京大学出版会。
- 、2009、『学歴分断社会』ちくま新書。
- 中村高康、2006、「専門高校からの大学進学——アスピレーションの推移の分析から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』32: 125-44。
- 西村貴之、2006、「思わぬワンランクアップとしての大学進学」乾彰夫編『18歳の今を生きぬく——高卒1年目の選択』青木書店、179-204。
- シム・チュン・キャット、2004、「シンガポールの教育とメリトクラシーに関する社会学的研究——再加熱装置としての技術教育校」『教育社会学研究』74: 269-88。